

Title	書評：三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶：台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』慶應義塾大学出版会、2016年
Sub Title	
Author	藤森, 智子(Fujimori, Tomoko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.125- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：三尾裕子・遠藤央・植野弘子編

『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』

慶應義塾大学出版会、2016年

藤森 智子

近年、「帝国日本」と名の付く出版が数多く見られる。歴史学、教育学、社会学、政治学などの人文科学、社会科学の分野で、帝国日本研究の蓄積が厚くなった証左であろうが、それら著書の多くは、帝国日本の統治に関して、または帝国日本と他地域との関係を論じているものがほとんどである。従って、タイトルは「帝国日本」の後に、それぞれの研究テーマとされる領域が続く。振り返って、本書のタイトルを見ると、『帝国日本の記憶』である。記憶する主体は人間、ひいては社会であるはずである。表題の背後に、ヒトの気配を強く感じさせるのであるが、読んでみると、本書はその期待を裏切らない。

本書は、10名の執筆者からなる論集である。台湾と旧南洋群島の二地域を取り上げ、「この二つの地域の人々が、戦後の新しい統治者のもとで生を営んで行くにあたって、外来の統治者が日本の残した文化、制度などをどのように取り扱ったか、また戦後の当該地域と日本との間にいかなる経済関係や人的交流があったかなどに留意しながら、人々が「日本」をどのように他者化したり、排除したり、あるいは自らの文化の中に内在化させたりしていったのかを具体的事例に基づいて論じ」ることが意図されている（三尾裕子「台湾と旧南洋群島におけるポストコロニアルな歴史人類学の可能性」）。

周知のように、台湾は1895年、日清戦争後に清国から日本へ割譲され、その後1945年までの50年間、日本の統治下に置かれた。戦後は中国大陸から遷移した国民党の支配下で、二度目の外来政権を経験することとなった。台湾の人々は、清から日本へ割譲された時と同様に、自身の意思とは無関係に日本国から中華民国へと属する国家が転換された。また、旧南洋群島は、第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治領として日本が統治し、戦後は「戦略的」信託統治地域として米国が統治した。台湾と同様に、二度の外来政権を経験することとなったのである。本書は、この二地域の比較を念頭に置きながら、戦前・戦後と、二つの外来政権下を生きた人々の重層する体験を、幅広い領域で取り上げている。

本書の研究の対象が台湾と旧南洋群島の統治に派生する事象なので、第1部は「日本の植民地支配と国際環境」として、「台湾や旧南洋群島地域を支配する側に軸足をおいて、支配者側がそれぞれの地域をどのようにまなざし、また統治しようとしてきたのかという点を取り上げている」。遠藤央「委任統治・信託統治と「日本」——戦後の始まりあるいは記憶と忘却のずれについて」では、委任統治と信託統治の連続性と不連続性を明らかにし、またハンセ

藤森智子「書評：三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』」

『三田社会学』第23号（2018年7月）125-128頁

ン病隔離政策の実例などを挙げながら、戦後の国際秩序を再考している。松金公正「台湾における日本仏教の社会事業——1895-1937」は、日本から台湾に渡った仏教布教使による社会事業の実施状況を取り上げ、その特徴を検討しながら、布教使たちの中には同一事業を内地人と台湾本島人との二つの対象に向けて開示し対応するといった本国にはない「経験」をしたことを指摘している。また、林虹瑛「言語接触と植民地——最初の官製「日本語-台湾語」教科書『新日本語言集』を中心に」は、台湾領有初期に出版された最初の日本語-台湾語の官製教科書を取り上げ、本教科書は日本人と台湾人の双方のものであったが、その後出版された日本人用の語学教科書は、警察などの一部の日本人に向けて一般教養ではなく植民統治に必要な内容に限定して作成されたことが指摘されている。いずれも、日本の植民統治と現地社会の一断面を分析するのみならず、重層化した支配や文化を念頭に執筆されている。

第2部「複数の文明・政権を跨ぐ記憶」では、「日本と中華民国、あるいは日本とドイツ、アメリカ、儒教を中心とする中華文明と日本を介した西洋近代文明、日本教育とキリスト教等、異質な文明、文化を跨ぐように経験して来たパラオ、台湾の人々の経験を取り扱っている」。三田牧「パラオの語りにもみる植民地経験のリアリティ」では、日本とアメリカによる支配を受けたパラオの人々の経験を聞き取り、それぞれの話者のリアリティを汲み取ろうと試みている。植野弘子「植民地台湾の生活世界の「日本化」とその後——旧南洋群島を視野に置いて」は、日本植民統治期の教育において「日本化」がいかにかえられたのか、旧南洋群島との比較をしながら、台湾の「日本化」の特質を明らかにしている。ハイカラとされる日本の産物は戦後もイメージを保ち続け、近代的な衛生観念も肯定的に評価されたが、修身の時間に教えられた近代西欧的知識と儒教的価値は、日本時代の教育の真髄と認識されたが、そこに同時に存在した皇国史観は、戦後は抜け落ちていったように、「日本化」が状況の中で操作されていくものであることを指摘している。藤野陽平「台湾における「日本語」によるキリスト教的高齢者ケア——社団法人台北市松年福祉会玉蘭荘の機関紙分析より」は、「日本語族台湾人」(戦前の教育ゆえに、日本語を使わなければ自分の考えを十分に表現できない人々)や「日本人妻」(太平洋戦争後の混乱期に帰国できず、あるいは帰国せずに台湾で暮らすことになった女性たち)が集う「玉蘭荘」という日本語で運営されるキリスト教の高齢者施設を取り上げ、社会的空間としての「玉蘭荘」が、①台湾にあって、②ゆるやかな「日本空間」における、③「日本語」による④ケアだからこそ実現できた⑤パラダイス(キリスト教的空間)という複合的要素を持っており、どれ一つが欠けても何か別の歪なものになってしまうと分析している。いずれも、現在高齢の人々、または既に存命ではないと思われるパラオと台湾の人々の、複数の政権下を生きながらその経験を分析している。

第3部「脱植民地化の試み」では、「戦後、新たに外から入ってきた政権のもとで、脱植民地化が代行された台湾とパラオにおいて、住民自身が、如何に脱植民地化を試みたのかを論じている」。飯高伸五「パラオ・サクラカイ——「ニッケイ」と親日言説に関する考察」は、「ニッケイ」と呼ばれる日本人移住者の男性と現地人女性との間に生まれた人々が、1960年

代半ばに組織したパラオ・サクラカイの活動を取り上げ、「パラオ＝親日」という言説を批判的に検討し、彼らの慰霊団の受け入れに代表される日本人への厚遇は、親日感情のあらわれではなく、統治国家が交代した戦後の歴史過程の中で、日本統治経験をノスタルジーの感情を交えて解釈、再解釈していると分析している。石垣直「交錯する「植民地経験」——台湾原住民・ブヌンと「日本」との衝突・接触・邂逅」では、台湾先住民ブヌンを事例に、彼らを日本統治や中華民国統治を受けた年代によって四つの世代に分け、外来政権による統治に対する彼らの反応を時系列に整理し、それらの支配を経る中で彼らが「抵抗者」・「逃避者」から「従順な被支配者」へと転向を余儀なくされたことを指摘している。上水流久彦「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民地主義的研究——台湾の植民地期建築物を事例に」では、韓国や旧南洋群島と比較しながら日本植民地期の建築物の利活用の現状分析を行っている。台湾の日本植民地期の建築物が他者と差異化し自己表象の道具にする「内部化」、日本出自が意味を持たず台湾の文化に溶け込み「溶解化」される要因を分析し、また、台湾において「日本」が持つ意味は一樣でなく、台湾社会の要望に応じて借定され、選択され、変わることが指摘されている。いずれの論文も、戦後、新たな外来政権の下で、パラオ、台湾の脱植民地化の事例を検討している。

このように、本書は「帝国日本」に関わる記憶として、広いテーマを扱っている。そこには、国際関係、社会事業、言語といった統治に関わるテーマが取り上げられたり、あるいは生活の一断面を取り上げて複数の政権下を生きた記憶が語られたり、パラオの「ニッケイ」や台湾先住民族といったマイノリティや建築を通じての脱植民地化が取り上げられたりしている。多岐にわたる主題を扱っているが、本書全体に一貫しているのはヒトへの眼差しであるといえよう。本書では、歴史学や人類学の手法を使い、多くの論文にフィールドワークの内容が盛り込まれており、そこに生きた人々の生活、息吹が伝わってくる。台湾、ミクロネシアで戦前・戦後に跨る複数の政権下を生きた人々の多くはすでにこの世を去り、存命であったとしても高齢である。聞き取り調査は年々難しくなっているが、多くの貴重なインタビュー成果が取り上げられている。これは、長年現地調査に従事してきた研究者たちの成果である。本書を読むと、「親日的」とされる両地域の人々が日本統治期から今まで負ってきた歴史と様々な思いに対して、改めて多くの気づきを得る。そして、同時に、戦後の脱植民地化が行われないうま現在に至る日本をも再認識するであろう。

また、本書の構成は第1部で植民統治期を取り上げ、第2部、第3部と進むにつれて、複数の政権を跨ぐ記憶、さらには戦後の脱植民地化と、扱う時期がより現在に近づき、同時にその期間がより長期にわたるよう配置されている。広範囲なテーマを扱いながら、縦軸として歴史を幅を持って切り取り検討することで、社会変動や人々の対日感情の変化が明らかにされている。台湾を観察してきた者であれば、政権の交代や国際環境、時間の経過などによる社会の変容に伴って、日本統治時期の見方、対日感情が変化していることは、訪問するごとに感じることであろう。80年代や90年代までは、かつての統治者であった「日本人」であ

ることにある種の価値が付与され扱われることがありがちであったが、近年に至ってはそれが特別な意味を持たず、諸外国のひとつとして扱われる、または日本に対する視線が、アニメに代表される大衆文化への関心に由来しており、日本が統治した歴史とは関わりをさほど感じないことがしばしばあるようである。本書では、こうした日本人や日本統治時期の事物に対する脱植民地化を整理するヒントが提示されている。複数の政権を跨いだ重層化された社会の事象が多角的に検討されているので、現在の台湾やミクロネシアを考える上でも大いに助けとなるであろう。

最後に、本書の特徴として、横断的研究の端緒を拓いていることを指摘したい。近年、植民統治に関する研究は多く見られるようになってきたが、植民地の比較研究は、未だ開拓が待たれる分野であり、これは学界の課題といえよう。台湾、朝鮮、満州、旧南洋群島といった複数の日本の旧植民地・占領地を取り上げた地域横断的な研究は、その重要性が認識されながら未だ成果が少ない。その点で本書は戦後、再度外来政権を経験した地域という視点から台湾と旧南洋群島を研究対象として取り上げ、横断的研究の新しい視座を示し、学界における課題に対する端緒を拓いたといえよう。

(ふじもり ともこ 田園調布学園大学)